

二つの駆け込み寺

石井 志津夫

二つの駆け込み寺が私の人生を変えた。私は今もそう信じている。一つは、少年時代のお寺と、もうひとつは現役後からの仮想寺である。

小学三年の秋、祖母が突然病死した。初めて体験する肉親との別れであった。祖母は畑仕事で忙しい母に代って、よく面倒を見てくれた。私とすれば、物心ついてからそれまでの、祖母に甘えての生活が途切れた。寂しさ、悲しさから心がすさんだ。そこから、最初の反抗期がはじまったのである。

学校では、友達とのけんかがたえず、廊下に立たされることが多かった。家に帰っても、母親に甘えることができず、うさばらしからか、家中を物色し、母親の財布を見つけ出し、みつかることはわかっていたが金を抜き取った。何に使うわけでもなかった。

父母は激怒し、夕食前兄弟のいる前で、

「どうしてそんなことをしたんだ。自分のしたことがわかっていないのか」と責められた。どうしても素直に「すみませんでした」と謝れなかった

「反省できないのなら、家を出ていけ」と押し出された。

いったんは納屋の藁のなかに横たわったが、せつなさに涙が止まらなかった。しばらくして、名つけ親でもある父がたの親戚にあたる、日蓮宗蓮長寺の斉木住職のところに、駆け込むしかないと思った。

べそをかきながら、1・5キロの夜道をひた走った。

「こんばんは、こんばんは」玄關をたたき、

「おまえか、どうしたんだ、さあ上がりな」と年取ってはいるが、おだやかな夫妻が家に入れてくれた。泣きながら事情を話した。

「そうか、そうか」と全てを聞き入れてくれた。あたたかな夕食もいただき救われる思いであった。

「あとで、家と連絡を取るから大丈夫だ」とやさしい言葉をくれた。一時間後に、父と兄が自転車で迎えにきてくれた。

このときの、夫妻の対応に感激し、幼ごころに、この恩はこれから返して行くんだと心にきめた。以来、住職が亡くなるまでの七年間、時間があると寺に行き、墓や家の周りの草取りや、リヤカーで精米所へ、さらには病院へ住職の薬を取りに、買い物の手伝いなどもした。この間、人生経験豊かな夫妻から、多くのことを学ぶことができた。それが後々までわたしの心の財産となった。

もうひとつの駆け込み寺は、六十歳をすぎ
て自遊人の仲間入りをした機会につくった私
設の仮想寺である。

築30年のボロ家が、幕張のマンションか
ら40キロ離れた茂原にあった。妻と意見が
一致し、この家をリフォームしてセカンドハ
ウスとして活用することに決まった。妻の願
望は、

「庭は花木や草花でいっぱいにしよう。週
末は二人で出掛けて、近くの畑で野菜作りも
してみたい」と長年持ち続けたものであった。
ボロ家の名称は、私のこだわりで、「茶論亭
志」(さろんていこころざし)にした。

サロンのように、何時でもだれでもが、気
兼ねなくくつろげる処でありたい。寝食さえ
できればいいので、大型の冷蔵庫と電子レン
ジ、ラジオ以外はこれといった利器は置かないと決めた。マンション生活が、
情報機器や情報いっぱい、『オン』の環境なら、ここは、何もない『オフ』の
静寂な環境である。

利用するのは、主に私たちと嫁に出した娘たち家族とした。それぞれに鍵を
渡し、困った時にはいつでもここに駆け込める、仮想の駆け込み寺をイメージ
した。

茶論亭も、十年を過ぎたが、寺の役目として利用した形跡はない。もっぱら、
妻と二人で週末農業の宿泊所としている。娘が連れ合いと気分転換に遊びに来
る。また、親しい友人や夫妻との、もちつきとラッキョウ作りや茶話会などに
時々活用している。

よくしたもので、備えあれば憂いなしで、駆け込み寺があるのに、夫婦げん
かも起きていない。

いまだに寺としての役割は果たしてしていないが、花いっぱいの茶論亭は、
こころのオアシスになっていることがうれしい。



茂原 茶論亭